



左の人物は私たちプロテスタント・キリスト者にとっては、最も重要なドイツ人、マルティン・ルター（1483-1546）です。私たちはルターの足跡を訪ねて、ルターが回心したアウグスティヌス修道院、ヴィッテンブルグの教会、訴追され匿われて新約聖書を翻訳したヴァルトブルグ城を見学しました。当時のままに残されている場所に立ち、感激したことを忘れることが出来ません。

ルターの働きにより、聖書が身近な読物となり、信仰を選ぶ自由を手にすることが出来たのです。彼がヴィッテンブルグの城教会の扉に、カトリック教会への95の質問状を提示して、来年には500年になります。

上野の西洋美術館で開催されている「クラナハ展」に立ち寄りました。ルカス・クラナハ（1472-1553）の絵は聖書物語の挿絵として用いられていますので、馴染みがありました。同時期のイタリアのルネッサンスの絵画と比べ、伸びやかさがなく、中世的、ゴシック的に感じ、今まで感動するほどに、彼の絵を眺めることがありませんでした。ところが、この肖像を描いたのはクラナハであり、ルターの友人であったということを知りました。急に、親しみ(?)を感じたのは奇妙でしょうか。今回は「500年後の誘惑」というサブタイトルが付いていました。それは3年にも及ぶ修復の甲斐あって、光を取り戻した「ホロフェルネスの首を持つユディット」の絵のためだったのでしょうか。美女が男の生首と剣を手をしている、ある意味でグロテスクな絵です。



絵の主人公・ユディットを知る人は少ないでしょう。士師記の女預言者デボラの友人の主婦ヤエルがイスラエルの敵カナン人の將軍シセラが寝ている時に、こめかみに釘を打ち込んで殺し、勝利を得た(士師4:14)のと似ている事件が旧約聖書続編の2番目にあるユディット記に記されています。ユディットは神を畏れる信仰深い女性でした。夫に死なれ、常に喪服で暮らしていましたが、非常に美しく魅力的な女性でした。アッシリアの横暴な圧制に対し、ユディットは民を守るため、計略を持って、敵に向かいます。この時ユディットは喪服を脱いで水で身を清め、芳醇な香油を塗った。そして、髪を整えて髪飾りを付け、晴れ着をまとった。足にはサンダルを履き、足輪や腕輪、指輪や耳飾りなど、あらゆる装身具で

装いを凝らした。そのうえ、彼女を見る男たちの目を惑わすために、できるだけ美しく化粧した。(ユディット 10:3) その時の美しい寡婦ユディットが密かな目的を果たすために、装った最高の姿をクラナハは描きました。

ユディットはそこに入って来て、席に着いた。ホロフェルネスの心は彼女に魅了され、魂は揺さぶられた。そして、ユディットを抱きたいと言う激しい欲情にかられた。彼は初めて彼女を見た時から、誘惑しようと機会をねらっていたのである。(ユディット 12:16) ところが敵の將軍ホロフェルネスは酔わせられ、寝首を搔かれて殺されました。

「500年後の誘惑」とは修復によって絵の輝きを取り戻したということでしょう。肌の色が美しいのです。「アダムとイブ」や、「ヴィーナス」などの裸像の肌の透明感に魅了されます。ただ、身体の均整が不自然で、上半身が小さいのです。クラナハは女性を「誘惑する存在」と感じ、女性に誘惑されないよう教訓的意味合いを込めて描いたと解説がありました。アダムとエバの物語の時代から、男性は女性を誘惑者として、感じ続けているのでしょうか。クラナハは露骨にならないために、女性の性的魅力のポイントと思われる「胸」を控えめに、少女のような硬さにして、描いたように感じます。肖像画家としての力量と、その時代らしさを細部にわたって描き出す緻密な写実と、宗教画も多く、宗教改革者であるルターを支えた友情を知りました。